

219-1953

日本組織培養学会

昭和63年12月20日

会員通信

第 67 号

発行責任者

鈴木利光 (福島県立医大), 菊川忠裕 (聖マリア  
ンナ医大), 許 南治 (東大・医科研), 間中研一  
(獨協医大), 大島 浩 (大阪歯大)  
福島市光が丘1 (〒960-12)  
福島県立医大第2病理  
電話 (0245) 48-2111 内線 2190



## § 昭和63年度第2回幹事会議事録

日時：昭和63年10月17日 (月) 午後1時30分～6時30分

場所：国立衛生試験所第二会議室

出席者：黒田行昭，難波正義，梅田 誠，鈴木利光，野沢志朗，桶田俊光，菊川忠宏，  
中野修治，水沢 博，(以上幹事)  
加治和彦，渡辺正巳(以上機関紙検討委員会)，乾 直道(会計補佐)  
蔵本博行(代理 浜野美衛子，昭和64年度大会委員長)，  
大野忠夫(細胞バンク小委員会)

黒田会長より開会のご挨拶があり，昭和63年度第2回幹事会が開催されました。

### 1. 報告事項

#### (1) 会長報告(黒田会長)

第1回幹事会の後，本学会秋のシンポジウムの開催について検討いたしまして，  
10月18日(火)東京医科歯科大学において動物代替法研究会との合同で「動物代替  
法としての組織培養-in vitro系がin vivo系にどこまで迫れるか」を開催する  
ことになりました。また，先日大分で行われました第61回大会の総会で提案されま  
した細胞バンク小委員会および昭和55年に発足しました教育問題小委員会につい  
てもその設置および活動について本幹事会で御協議をお願いします。

#### (2) 庶務報告(難波幹事，水沢幹事)

本年第1回幹事会以降9月までの入会者は17名，退会者は3名です。昭和63年9  
月30日現在の会員数は正会員658名，外国会員17名，賛助会員60社です。新入会員  
については学会事務センターからの入会申込書等の資料のとうりですのでご承認を

お願いします。

(3) 会計報告（梅田幹事，乾会計補佐）

会費値上げの総会承認を得るために請求書の発送が遅れたためと考えられますが、会費の集りがあまりよくありません。会員名簿は2年に1回発行するため、毎年費用を積立ます。名簿の発行費用は約50万円です。本年4月1日以降の会計収支中間報告は表1（後述）のようになっています。

(4) 渉外報告（野沢幹事）

国際細胞培養連合（IACC）のMcGarity会長あてに、当学会の会長および役員の変更が行われ、本年4月1日より新会長、新役員が就任したむねの連絡を行いました。

(5) 機関誌報告（桶田幹事）

本年第1回幹事会で発足が承認されました機関誌小委員会が7月22日に開催されました。機関誌発行責任者に桶田俊光氏（機関誌担当幹事）、機関誌検討小委員会委員長に渡辺正巳氏（継続）があたることになりました。機関誌の問題についてはこれまでワーキンググループで議論が進行していますが（後述）、組織培養研究第7巻第2号は特集1、特集2とし従来通りの方法で編集いたします。特集1は細胞生物学上の興味深いテーマをとりあげ、特集2は秋のシンポジウムの内容を20ページほどでまとめる予定です。その他総説、ニュース、報告（外国の細胞生物学会の報告等）等を掲載します。

(6) 会員通信報告（鈴木幹事）

8月20日に新幹事になってからの第1回目の会員通信、第66号、を発行しました。印刷所は新潟の地元の会社をお願いしました。第2回目、第67号は12月中に出す予定です。本年4月に逝去された三宅清雄先生の追悼文を写真とともに掲載する予定です。すでに一部原稿を預かっています。その他秋のシンポジウムの報告、64年度大会の案内なども掲載します。大会の詳細な案内と申込書は第68号（来年3月）に掲載する予定です。今回は原稿の集りが遅く大変困ったのでなるべく早く出して頂くようお願いします。新入会員の掲載リストは学会事務センターから直接送付してもらう予定です。

## 2. 協議事項

### (1) 第62回（昭和64年度）組織培養学会大会について（蔵本博行会員代理浜野美衛子）

会期は昭和64年6月29日（木）、30日（金）とし、7月1日（土）を予備日とします。会場は神奈川県勤労会館（横浜市、JR石川町駅前）の予定です。特別講演は、佐藤二郎先生、Dr.M.E.Lippmanを予定し、交渉中です。ワークショップとして“functional culture”と“培養技術最前線”と題して公募の予定をしています。開催地が横浜で、人数的に多い東京からの参加者は、夜間帰宅する人が多いと予想されますので、夜のシンポジウムはやりにくいかもしれません。したがって開催方法については検討が必要です。なお小委員会、幹事会等の会場も準備する予定です。

### (2) 第63回（昭和65年度）の大会について

過去5年間の大会開催地を考慮して、第63回（昭和65年度）大会は 林原研究所 蓑和田先生、広島大学井出先生などが候補にあがりました。討議の結果蓑和田先生を第一候補とし第二候補を井出先生として交渉にあたることとなりました。

### (3) 第4回（昭和64年度）シンポジウムについて

昭和64年度の秋のシンポジウムについては、1年に大会とシンポジウムは多すぎるので、大会だけにしたほうがよいという意見と、学会の活性化のためシンポジウムもやるほうがよいという意見があり、他の学会との共催シンポジウムなども考慮して、今後さらに検討することになりました。

### (4) 第3回学会奨励賞について

第3回学会奨励賞は規程（奨励賞の選考規定は会員通信63号に掲載）によって昭和63年度、64年度の2年間の大会発表者の中からすぐれた研究内容で、すでに雑誌等へ出版公表されたものに限って選考します。本年は募集が遅れていますが、会員通信第67号（12月に発行予定）に募集要項を掲載し、締切を1月末日とすることになりました。推薦のあった候補者の研究発表、履歴書、発表論文等の資料は締切後すぐに幹事および大会発表時の座長に回覧し、次回の幹事会に諮って決定します。

### (5) 細胞バンク小委員会について

細胞バンク小委員会は第61回大会の総会の際、梅田 誠会員から提案があり、委

員会設置の方向で検討されて来ましたが、7月2日に開かれた第1回および10月17日に開かれた第2回の会合の内容について梅田 誠および大野忠夫会員から報告されました。第1回の会合の内容は会員通信第66号(21-22頁)に記載されていますが、幹事会ではこの会合を正式に細胞バンク小委員会とすることが承認され、会議費等は特別会計から出費することが了承されました。第2回の会合の内容は会員通信67号(本号)に掲載されています。

現在各省庁で小さな細胞バンクが複数設置されてしまっている現状を考え、相互の協力体制を確立することが重要であることが確認されました。具体的には、細胞株情報システムの確立、品質管理方法論などについて統一化を計ること、細胞株の所有権や樹立者の権利を保護する方法について今後議論を深める予定であることが報告されました。また、株名登録委員会を細胞バンク小委員会へ移行することが、株名登録委員会の佐藤二郎委員長から提案されました。細胞バンク小委員会は2年間で審議を終える予定の時限小委員会ですが暫定的に移行することとしました。

細胞バンク小委員会は本学会が主体となった委員会ですが、小委員会で検討したことをもとに各省庁へ要望を出し利用価値の高い細胞バンクシステムとなるよう学会としても努力することが必要であることが確認されました。なお細胞バンク小委員会で討議された内容は幹事会や大会を通じて会員の方々にもお知らせすることになりました。

#### (6) 教育研究システム小委員会について

組織培養技術は多方面にわたって重要な研究技術やその方法論となっているにもかかわらず、大学、大学院教育の中ではカリキュラムに組み入れられておらず、組織培養の講座も設置されていないのが現状です。こうした現状を改革することを目指し(昭和54年7月25日、会員通信第39号)、「研究教育システム委員会」(会員通信第41号)が設置されました。この委員会はこれまで「組織培養の技術」(昭和57年)、「細胞成長因子」(昭和59年)、「細胞成長因子, part II」(昭和62年)など、主に組織培養に関する技術書などの出版による啓蒙活動をおこなってきています。今後「組織培養による毒性試験(仮称)」,「細胞生物学(仮称)」の編集、発行を行う予定です。

これまで発行されてきた書籍は評判もよく、本小委員会の継続を幹事会として承認しました。

幹事会では毒性試験に関する書籍は非常に多く出版されているので新たに作る必

要があるのかとの意見も出されましたが、代謝毒性なども含めた各種毒性を組織培養技術を中心に編集するのは比較的ユニークであるので既定方針どおり上記の出版を行うことが承認されました。本の内容については編集委員会で検討することが了承されました。

#### (7) 機関誌検討小委員会について

7月22日に東大医科学研究所（出席5名）で開催された機関誌検討小委員会の結果が報告されました。前回幹事会の討議内容を受け、(1)幹事会改選にともなう機関誌検討小委員会委員の選出、(2)昭和63年度第7巻第2号の発行についての検討（前述）、(3)機関誌「組織培養研究」の今後について検討しました。特に議題(3)は早急に結論を出すことが求められている重要課題です。

機関誌「組織培養研究」をより充実したものにするには、編集委員会を幹事だけで構成するのではなく、幹事会からある程度独立したものとする必要があるとの結論に達しました。編集委員会の構成は編集委員長1名、編集委員8名程度が妥当であると考えられ、そのうち2名を幹事会から出すことが適当であろうと考えました。幹事以外の編集委員は4年を任期とし、半数ずつ改選し、編集委員長は長期間担当し一定の編集方針を貫くことが望ましく、編集委員は地域的に分散化を計る必要があると思われます。早急に編集委員会を発足させることを目指し、編集委員会の構成と投稿規定の草案を作成し次回の幹事会に提出する予定です。なお、草案を提出した時点で現機関誌検討小委員会は解散する予定です。雑誌のスタイル、内容などの詳細は、新たに発足する予定の編集委員会で検討することが望ましいと思われます。

以上は幹事会の討議を経た後了承されました。

## § 昭和63年度会計中間報告

昭和63年度会計の中間報告は表のようです。9月30日現在でまとめてあるので、まだおおよその動向しかわかりません。しかし、今年度の会費納入の依頼が遅れたこともあり、収入の部の会費納入率が低いのが気になります。

まだお納めいただけてない会員の皆様には是非お振込みいただきたくお願い致します。

# 昭和63年度会計中間報告

(昭和63年4月1日～9月30日)

## 一般会計

### 収入の部

勘定科目	昭和63年度予算	現在高	摘要
正会員費	2,800,000円	2,158,000円	
賛助会員会費	1,700,000	920,000	
入会金	50,000	23,000	
繰入金	0	0	
広告収入	1,000,000	0	
雑収入	0	60,000	Back No収入
小計	5,550,000	3,161,000	
前年度繰越金	67,846	67,846	
合計	5,617,846	3,228,846	

### 支出の部

勘定科目	昭和63年度予算	現在高	摘要
研究誌No.2発行費	1,500,000円	0円	
会員通信発行費	450,000	0	
大会補助金	400,000	400,000	
新規事業補助金	300,000	300,000	
IACC加盟費	250,000	0	
同事務費	200,000	0	
業務委託費	800,000	0	
研究誌No.2発送費	170,000	0	
事務通信費	510,000	50,090	会費請求書送料等
会員名簿作成費	280,000	0	
雑費	400,000	118,740	ワーキンググループ旅費等
予備費	100,000	0	
小計	5,360,000	868,830	
収支差額	257,846	2,360,016	
合計	5,617,846	3,228,846	

## 特別会計

### 収入の部

勘定科目	昭和63年度予算	現在高	摘要
寄付金収入	220,000円	409,259円	合同酒精より
出版収益	535,000	420,290	朝倉書店より印税
広告収入	0	0	
利子収入	150,000	137,184	定期預金利子等
雑収入	0	0	
小計	905,000	966,733	
前年度繰越金	9,296,139	9,296,139	
合計	10,201,139	10,262,872	

### 支出の部

勘定科目	昭和63年度予算	現在高	摘要
外国人招待費	100,000円	200,000	本年度大会補助
学会奨励賞	600,000	600,000	
引渡金	0	0	
雑費	0	300,200	細胞バンク委員会費
小計	700,000	1,100,200	
収支差額	9,501,139	9,162,672	
合計	10,201,139	10,262,872	

## § 細胞バンク小委員会 昭和63年度第2回会議議事録

日 時：昭和63年10月17日（月）午前10：00～午後1：00

場 所：国立衛生試験所・第2会議室

出席者：梅田 誠，大野忠夫，山田正篤，松村外志張，竹内昌男，常盤孝義，  
長山英夫代理，鈴木利光，水沢 博  
欠席（黒田，三井，許）

### 1. 梅田 誠委員長の挨拶で開会

### 2. 前回の会議内容の確認と討議方針について（大野）

委員会の性格，細胞バンクを運営のデータベースの統一。

品質管理方法論の統一。

細胞の所有権をどのように考えるか。

わが国全体の細胞バンクに対する運営方針を学会としてどう考えるか。

（省庁ごとにばらばらという事態を避けなければならない）

### 3. インターバンクデータベースシステムについて（水沢）

資料にもとずき基本的なデータベースの構造と補助データベースの構造について説明。入力部分のプログラムも一部作成し試験的に理研，発酵研で入力している。

将来的には利用者が自由にアクセス出来るようにしたい。理研のミニコンピュータシステムにデータを移行しこれにアクセスするようにしたい。利用者に解放するデータは基本データと文献情報で，品質管理，保存管理情報は解放しない。

次回には理研，発酵研で入力したデータを出力して資料として提出。基本ソフトとして市販のデータベースマネジメントシステム（dBASEIII，約25万円が必要）。

### 4. 品質管理方法の統一について，特にマイコプラズマ検出法（大野）

資料により説明。Veroを指標細胞とした間接法（Hoechst 33258による染色法）を取り入れる。培養上清，あるいは細胞破砕物について検査を実施する。さらに検討して最終決定。最終プロトコルにはマイコプラズマに加えて，細菌，カビ等の汚染検



査も標準化することが望ましい。その際付け加えることとして、検査に先立って実施する細胞培養法、サンプル調製法、陽性陰性対照実験の方法、判定方法、指標細胞の管理方法を明記する。

## 5. 細胞の所有権および細胞株使用上の倫理問題について（松村，竹内）

倫理問題は他の倫理委員会と共同で議論することが望ましい。学会としても別にこうした委員会を作る必要もあると思われる。また、学会関係者だけでなく、一般のヒトにも加わってもらふ必要もあろう。現状では利用者（研究者）の利益だけを考えるとならず、患者のプライバシー保護の観点も持つ必要がある。

ガイドラインを作成してそれにそって議論するのも良いが、この問題については例外も多く、個々のケースについて議論を深める必要がある。また、細胞株を樹立するという仕事が大変であることから、樹立者のかかわりかたについても議論を深めるべきである。その他米国OTAレポートがサマライズされて紹介された。

日本の細胞株の特許寄託の現状について、紹介された（竹内）。相当数が企業から特許にされつつあること。外国と日本との特許の考え方、方法の違いなどについて紹介された。

## 6. 細胞バンク間の調整連絡について（大野） 自由討議

小さな細胞バンクがばらばらなことをしても困るので、相互の調整を行う必要がある。各省庁のバンクを一体にすることが望まれるが現状は困難なので実行上どうするかを議論する必要がある。具体的方法を含む案をまとめる必要がある。それを基に各省庁、他学会などへ要望を出す。協力体制についてはJFCC（微生物保存連盟）からもさそいがあるので検討する。なお、JFCCという微生物には培養細胞も含まれる。

細胞を利用する研究者、樹立者、患者あるいは細胞提供者に対しての統一的な考え方、バンク経営のための方法論、外国との交流法などについて討議し結論を出す。

## 7. その他

- (1) 組織培養学会細胞株名登録委員会に登録してある細胞を本小委員会で管理すること（前学会長佐藤二郎先生提案）が幹事会で承認を受けたならば、具体的方法について検討を行う。
- (2) 次回に討議されるべき資料をあらかじめ各委員に送付しておくこと。
- (3) 次回の会議は来春培養学会の前日。

## § 秋期シンポジウムをふりかえって

金沢大学薬学部放射薬品化学教室 二階堂 修

雨のそぼ降る昭和63年10月18日に、第3回秋期シンポジウムが東京医科歯科大学において開催された。今回のシンポジウムはこれまでとは異なって、組織培養学会と動物実験代替法研究会との共催という形で開催され、組織培養法を動物実験の代替法として如何に活用するかということが本シンポジウムの主題の一つであった。約3カ月程前に世話人の理化学研究所の大野、金子両先生と放射線医学総合研究所の山田先生、組織培養学会会長の黒田先生、京大名誉教授の菅原先生にお集まり頂いて話を煮つめ、今回の企画となったのである。私自身も含め、世話人の先生方は全て両学会、研究会の会員であったため、講演者の人選等は比較的スムーズに行うことができた。もちろん学会会長の黒田先生からは貴重な御助言を頂いた。開催場所は地の利を考えて、東京医科歯科大学の室田先生のお世話になることとし、同大学の講堂を拝借することになった。さて、シンポジウムの宣伝をせねばならないと気付いたのが2カ月前、ポスターを作るのだがどの様なデザインがシンポジウムの主旨に沿うものか見当もつかない中で、餅は餅屋とばかり本職に頼むことにした。出来上がってから驚いた。黄色に赤、青の3原色が図の真ん中でバランスを取っているという奇抜なものである。ままよとばかり、尻をまくって全国200名の組織培養学会会員に発送を終えたのがシンポジウムの20日前という慌ただしさであった。ポスターを発送するや否や全国から問い合わせの電話が相次いだ。その多くは企業と医学部関係者、それに衛生研究所などの検査業務に携わっている方々からであった。組織培養学会会員からの問い合わせは殆ど無かったのが、今回のシンポジウムの性格を物語っているのかも知れない。企業の方々からの問い合わせには、なるべく参加される人数を絞り込んで参加下さるようにと頼み込んだ。というのは培養学会会員の参加数が予想できなかったからである。学会会場の準備は室田研究室の森田助教授を初めとする若い教室員の方々の御助力によって整った。看板書きからプロジェクターの借り出しまで殆ど全部をやって頂いたのは誠に有難かった。そこで、参加費をどのくらいにするかが問題となった。新潟大学の鈴木先生が主催されたシンポジウムは無料であったそうだが、ポスター印刷のツケもあり、やむなく1500円を頂くことにした。ま

た黒田先生の厳命により、シンポジウム終了後近くのお茶の水会館で懇親会を開くことにした。その費用を2000円と決めた。さて当日、8時30分には会場入口でもう参加者が待っている状態であった。アルバイトの人々と、私の教室の鈴木文男助教授、それに私が受付に座り、参加者の登録と抄録の配布、スライドの受付に当たった。他の世話人の先生方には場内進行、スライド映写等の監督や座長をして頂いた。シンポジウム参加者の合計は200人に達したが、100人を予定した懇親会は結局40人程度の参加にとどまり、大きな赤字を抱え込んでしまった。また、組織培養学会会員の参加は小数で、ほとんどが企業からの参加者であった。

シンポジウムの間、席に座って講演を拝聴する暇もないような忙しさであったため、シンポジウムの内容について述べる事が出来ないのはまことに残念である。それは他の人に譲ることとして、シンポジウム主催者としての心構えを書かせて頂く。

- ① シンポジウムに積極的に参加したいのなら主催者になるな。さもなければ面倒なことを他人に押し付けることになる。
- ② お金はいつも不足する。お金の当てがなければ主催者となるな。
- ③ 懇親会は見込みと違うことが多い。なるべく少なく見積るか、さもなければしない方が赤字を作らない。

終わりに、本シンポジウムの開催にご協力頂いた方々に心から感謝する次第である。その方々は、東京医科歯科大学の室田教授、森田助教授、それに同研究室の若い方々、私の所属する金沢大学の鈴木助教授、私の酷使に耐えた世話人の大野、金子、山田の諸先生である。さらにコーヒーとお茶、紅茶のサービスを頂いたメナード化粧品株式会社の小西研究所長にも深く感謝する。また自費ではあるが、この様な催しをまた開いて欲しいとの要望もある。そのような際には参加者の一人として参加したいと心に決めている。

## § 三宅清雄名誉教授のご逝去を悼む

京都府立医科大学 第一病理学教室 菅原 司



京都府立医科大学名誉教授、三宅清雄先生は、昭和63年4月28日早朝、京都第一赤十字病院で肺炎のために惜しまれつつ永眠されました。享年77歳の生涯でありました。

先生は明治44年1月10日に京都市北区にお生まれになり、昭和10年に本学をご卒業後、産婦人科学教室の副手・助手、病理学教室の助手を経られ、応召・復員後、病理学教室講師、本学附属女子専門部助教授、本学附属病院臨床検査部講師を歴任され、同40年本学第一病理学教室の教授にご就任になりました。この間先生は、大学管理職としても附属図書館長を兼務して貢献され、またあの激しかった大学紛争では、高い見識に裏打ちされたご意見を主張されて本

学の危機を救うために大きく尽力されました。先生は昭和49年3月にご定年・退職、同4年からは京都府立医科大学名誉教授になられると共に、懇請されて京都第一赤十字病院に検査部長として奉職され、以来14年間の長きにわたって病院病理業務との兼務に尽されました。

先生は、人体病理学を中心に輝かしい多くのご業績を残されましたが、特筆されるものの一つに、1960年代後半から1970年代前半にかけて情熱を傾けられた人癌細胞の培養研究が挙げられます（これらの成果の一部は“人癌細胞の培養”，“組織培養”——何れも朝倉書店——に分担執筆しておられます。）。先生はまず、器官培養法、倒立位相差顕微鏡と映画撮影法など、幾つかの重要な培養研究技術の改良・発展に寄与されました。続いて先生は、文部省がん特別研究の人癌の組織培養班を組織して活躍され、わが国で初めてヒト神経芽細胞腫の培養株化（NB-1株）に成功されました。この成果は、この腫瘍の株化が当時は外国でも困難であったので、国際的にも高い評価を受けました。さらに先生は、神経芽細胞腫の生物学的特性を究明するために、このNB-1株を用いてカテコールアミン代謝、細胞増殖動態、超微形態、染色体などを総合的に解析研究さ

れました。これらの知見は、この小児悪性腫瘍の診断法と治療法が今日のように著しく進歩するための重要な基礎になると共に、神経科学領域における神経伝達物質の研究にも有力な資料を提供することになりました。

美しい白髪の上品な先生は、穏やかな口調ながら説得力のある病理学の講義をされました。先生の学問に対する真摯な態度と清廉・高潔で温かいお人柄を慕って、多くの研究生がご指導を仰ぎに集まりました。先生はクラシック音楽もこよなく愛されました。また先生は、後任の得られる死の直前まで、日赤の病院病理業務を精魂傾けて実践され、気迫に満ちた厳肅な病理学者としての人生も、私達に示されました。このように社会に示された輝かしい大きなご功績により、先生は叙勲（勲四等瑞宝章、正五位）を受けられたのであります。

ここに今は亡き先生のご功績とご人徳を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## § THE ASIAN—PACIFIC ORGANIZATION FOR CELL BIOLOGY（略称 APOCB）の創立と その活動について

APOCB事務局長 沖 垣 達  
（重井医研・細胞生物）

去る8月、カナダ・モントリオールで開催された第4回国際細胞生物学会議の会場をかりて、上記のAPOCBが正式に発足しました。

かねがね、日本を含めたアジア地域の諸国から、細胞生物学に関する学術・研究団体があってもよいという強い意向があり、日本細胞生物学会を中心にそれへの準備が進められていました。この国際学術団体の目的は、アジア太平洋地域における細胞生物学の発展、研究協力態勢の充実、技術研修コースの運営などがあります。もちろん研究集会（国際会議）の主催もあります。

モントリオールでの創立総会には、Australia, New Zealand, China, Hong-Kong, India, Korea, Philippines, Taipei, Vietnam およびわが国からの代表が出席し、会則等を設定し、正式に発足しました。以上の国または地域の外に、Bangladesh, Indonesia, Iran, Iraq, Malaysia, Nepal, Pakistan, Thailand, などが

近々会員として加入する予定になっています。

初代の役員としては、会長Z. Yao (China), 副会長H. Naora (Australia) およびV. C. Shah (India), 事務局長T. Okigaki, 財務幹事S. Okada (いずれもJapan), 監査役G. L. Enriquez (Philippines) およびR. M. W. Chaw (Hong Kong) の諸氏が選出されました。

なお、第1回APOCB Congressは中国細胞生物学会の強い誘致を受けて、1990年11月3～7日の間、新築の上海国際会議場で開催されます。既にプログラムの作製が進み、本年末までには第一次案内が配布される予定です。学際領域という特性を活かして、プログラムの内容は動物、植物、微生物を問わず、基礎研究からバイオへの適用まで広く取り上げられる予定です。

以上、本学会ともきわめて密接な関係にある国際学会について御報告申しあげました。

## § 日本学術会議と本学会の関連について

日本学術会議研究連絡委員 沖垣 達

(重井医研・細胞生物)

会員の皆さん、日本学術会議 (Science Council of Japan) という組織の存在については御存知と思いますが、その役割についてはいかがですか？また、日本組織培養学会が構成員として代表を送っていることについては御存知でしたか？

学術会議 (通称) は、「わが国の科学者の内外に対する代表機関として科学の向上発展を図り、行政、産業および国民生活に科学を反映浸透させることを目的とする」もので、政府に所轄しつつ独立して職務を遂行する機関です。かつてはその会員210名は、資格を有する全国科学者の選挙によって選出されていましたが、前期 (第13期 昭和60年) から諸学会からの推せんによって選出されています。

210名の会員は専門分野毎に7部にわかれ、ほかに運営審議会、常置、臨時の委員会等がおかれています。具体的には「科学に関する重要事項を審議し、その実現を図る」審議機能と、「科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させる」という研究連絡的機能を兼ね備えています。

そこで、専門分野あるいは共通分野毎に、研究連絡委員会が設置されて、選出された会員の作業に協力する態勢ができています。研究連絡委員会 (研連) が学術会議の構造

上どこに属しているかについては、いささか複雑ですのではぶきますが、本学会に関連しては第4部(理学)と第7部(医学)にまたがる生物科学専門委員会に属する「細胞生物学研連」があります。

本年からの第14期の細胞生物学研連委員は、高橋泰常会員(医生研)を委員長に石川春律(群馬大)、大西俊一(京大)、岡田善雄(阪大)、冲垣 達(重井医研)、黒田行昭(遺伝研)、佐藤英美(名大)、田沢 仁(東大)、田代 裕(関西医大)、山田正篤(食薬センター)の10名です。この10名は日本細胞生物学会、日本生物物理学会、基礎老化学会、日本組織培養学会から代表として選出されています。日本組織培養学会からは従来山根 續(東北大)先生が出ておられましたが、今期から黒田会長に変わっています。また、山田正篤(基礎老化学会)先生と筆者(日本細胞生物学会)はいずれも日本組織培養学会員でもあります。

細胞生物学研連は、この研究分野での国際対応、国内の研究連絡、研究計画の策定などを行っており、対外的にはJapan National Committee for Cell Biologyとして任務を併せ持っています。

わが国の科学のおかれている条件や環境をみると、国際的にも国内的にも考えるべき点が大であると思います。それらのどれひとつをとっても、改善は決して容易ではありませんが、細胞生物学研連は、きわめて複雑な機構を持つ官と、個々には力のない学会との穴を少しでも埋めたいものと作業を進めています。

会員諸氏の十分の御了解と、御協力をお願いして、紹介にさせていただきました。

## § 日本組織培養学会第62回大会（予告）

日 時：昭和64年（1989年）6月29日（木），6月30日（金），  
7月1日（土）（午前，予備日）

会 場：神奈川県勤労会館

横浜市中区寿町1-4 （TEL 045-681-1031）

JR石川町駅前

プログラム概要：学会の趣旨にのっとり，一般演題に十分な時間をかけて討議する大会  
としたいと考えていますが，下記の特別講演，記念講演，ワークショップな  
ども予定しています。

特別講演 「肝細胞の培養（仮題）」

岡山大 佐藤 二郎

特別講演 「Hormone and cancer in vitro（仮題）」

演 者 （交渉中）

記念講演 「Vero細胞（仮題）」

独協医大 安村 美博（交渉中）

ワークショップI 「functional culture」

ワークショップII 「培養技術最前線」

かつて本学会の目的は，細胞をin vitroで安定した増殖系として維持することでした。そのために，無血清培地を含め様々な栄養要求性や技術の工夫が討議されてきました。現在もその重要性はいささかも減ってはいませんが，むしろ維持された細胞を“機能”させることによってそれぞれの専門分野の目的に応じた研究がなされているのが主体ではないでしょうか。そこで，培養という技術を通じて構成している会員が，それぞれの分野での成績を持ち寄って一同に会することは意義あることと考えています。

また，それぞれの分野で，個々に工夫された培養の技術を他の専門分野の研究者に伝達する場も本学会の目的とするところではないでしょうか。

そこで，「functional culture」と「培養技術最前線」の二大テーマを設け，広く会員から公募することに致しました。会員諸子におかれましては，主旨に賛同下さり，積



極的に応募下さるようお願い致します。類似の内容が多くまとまった場合には小シンポジウムとしてまとめたいと思っております。

横浜での本学会は大変久しぶりです。ちょうど、横浜市では市制100周年、開港130周年を記念する横浜博覧会の会期中でもあります。多数の御参加をお待ちしております。

世話人：蔵本 博行

事務局：北里大学医学部産婦人科

TEL 0427-78-9268

(組織培養センター・浜野美恵子宛)

内線 8414 (産婦人科)

## § 「第五回初代培養肝細胞研究会」のお知らせ

日 時：昭和64年6月8日(木)、9日(金)

場 所：三和化学研究所(新大阪駅より徒歩10分)

シンポジウム：「薬物代謝研究への初代培養肝細胞系の利用」

— 問題点, 改良点, 利点 —

特別講演も予定しております。

出席, 一般発表申し込みの詳細は下記に郵便にてお問い合わせ下さい。

連絡先：初代培養肝細胞研究会事務所

〒770 徳島市蔵本町3丁目18番地の15

徳島大学酵素科学研究センター 酵素病理部門

## § 編集後記

- 会員通信第67号をお届け致します。何かと落ち着かない1年でしたが、やっと終わったというのが実感です。
- 本号では名誉会員三宅清雄京都府立医科大学名誉教授の追悼文を、芦原 司教授（同大第1病理）にお寄せいただきました。三宅先生は去る4月28日に御逝去されました。本来なら5月の総会時に黙禱を捧げるべきところでしたが、その機会を逸してしまいました。先生の御冥福を慎しんでお祈り申し上げます。
- 新潟からの会員通信はこれが最後です。今月（12月）1日から福島に移りました。御連絡・御投稿は新住所（住所変更の項を御覧下さい）にお願いします。
- 編集後記は残務整理に戻った新潟で書いております。会員の皆様方、良いお年をお迎え下さい。

東の間の暗れ間の果ての佐渡白し

(T. S.)

## § 新 入 会 員

氏 名	現 住 所	所 属 機 関 ・ 所 在 地
一 瀬 一 郎 〒812	福岡市東区松島 2-2-43 ☎092-611-7377	九州大学医学部第一内科組織培養研究室 〒812 福岡市東区馬出 3-1-1 ☎092-641-1151
岩 崎 泰 雄 〒157	世田谷区砧 4-17-6 ☎03-417-5086	東邦大学大橋病院第四内科 〒153 目黒区大橋 2-17-6 ☎03-468-1251
内 山 靖 彦 〒259-11	伊勢原市東大竹 1160-2 ☎0463-93-7259	神奈川県総合リハビリテーション研究研 修所障害医学研〒243-01厚木市七沢1304 ☎0462-49-2859
岡 田 奈 津 子 〒663	西宮市天道町 17-13-104	大阪大学医学部附属病院皮膚科 〒553 大阪市福島区福島 1-1-50 ☎06-451-0051
坂 倉 康 則 〒020	盛岡市本町通 3-15-1-401 ☎0196-52-0621	岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座 〒020 盛岡市中央通 1-3-27 ☎0196-51-5111
杉 山 聡 〒870	大分市東野台 2-16-6 ☎0975-49-0065	大分医科大学脳神経外科 〒879-56大分県大分郡挾間町医大ケ丘 1-1506 ☎0975-49-4411
高 木 理 彰 〒990-23	山形市蔵王飯田 1504 イノビ ル 3-B ☎0236-33-2466	山形大学医学部整形外科教室 〒990-23山形市蔵王飯田字西の前 ☎0236-33-1257
高 橋 広 〒185	国分寺市泉町 3-4-2-703 ☎0423-25-6272	慶應義塾大学医学部眼科学教室 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211
田 所 望 〒321-01	宇都宮市双葉 2-9-5 ☎0286-58-1606	獨協医科大学産婦人科学教室 〒321-01栃木県下都賀郡壬生町北小林 880 ☎0282-86-1111
田 中 靖 彦 〒184	小金井市前原町 5-6-20 ☎0423-84-6232	慶應義塾大学医学部眼科学教室 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211
田 畑 直 人 〒880	宮崎市大字恒久 2409-3 ☎0985-53-1950	宮崎医科大学第一外科 〒889-16宮崎県宮崎郡清武町大字木原 5100 ☎0985-85-1510

氏名	現住所	所属機関・所在地
鳥原 久	〒532 大阪市淀川区野中北 2-6-29 クインテットハイツ 503号 ☎06-397-2994	クラブウ(株)技術研究所研究第1グループ 〒572 寝屋川市下木田町 14-5 ☎0720-23-8800
中嶋 重勝	〒243-04海老名市社家 930-4 ☎0462-33-6602	神奈川県総合リハビリテーション研究研 修所障害医学研〒243-01厚木市七沢1304 ☎0462-49-2859
中臣 康雄	〒956 新津市新栄町 15-21 ☎0250-22-5672	デンカ生研(株)開発本部研究部 〒959-16五泉市南本町 1-2-2 ☎0250-43-4111
長山 英男	〒980 仙台市八幡 5-6-5-705 ☎022-272-3202	東北大学抗酸菌病研究所癌細胞保存施設 〒980 仙台市星陵町 4-1 ☎022-274-1111
平尾 勇造	〒729-64広島県高田郡甲田町上甲立 496-5 ☎082645-2226	湧永製薬(株)第二薬理研究室 〒729-64広島県高田郡甲田町上甲立1624 ☎082645-2331
宮本 倉文	〒421-21静岡市油山 460 ☎0542-94-0463	循行部沢園芸研究室 〒421-21静岡市油山 460 ☎0542-94-0463

## § 住所変更

氏名	現住所	所属機関・所在地
秋元 一三	〒325-03栃木県那須郡那須町大字高久 乙3772 ☎02877-8-0743	獨協医科大学総研組織培養研究室 〒321-02栃木県下都賀郡壬生町大字北小林 880 ☎0282-86-1111
今安 正樹	〒468 名古屋市天白区表山 3-15-6 サニーヒル表山 10-104 ☎052-832-0634	(株)メニコン臨床研究部 〒451 名古屋市西区枇杷島町 3-12-7 ☎052-523-1111
尾崎 史郎		宇都宮東病院 〒321 宇都宮市平出町 368-8
川合 真一郎	〒565 吹田市山田西 2-8-A6-204 ☎06-876-7019	神戸女学院家政学部食物学科 〒662 西宮市岡田山 4-1 ☎0798-52-0955

氏名	現住所	所属機関・所在地
波川朝子	〒329-11 栃木県河内郡河内町中岡本 2566-46 ☎0286-73-1310	佐藤内科 〒321 宇都宮市峰町 492-4 ☎0286-33-7860
白川浩	〒112 文京区小石川 2-3-28-501 ☎03-815-3441	
関口豊三	〒251 藤沢市片瀬山 5-9-3 ☎0427-25-9009	（財）河野臨床医学研究所医学センター 〒140 品川区北品川 1-28-15
西島和弘	〒229 相模原市弥栄 2-2-1ディオール栄 1-202号 ☎0427-53-3639	川澄化学工業（株）開発本部 〒229 相模原市横山台 1-26-7 ☎0427-56-5612
藤吉宣男	〒194 町田市旭町 1-12-2 ☎0427-25-9009	協和発酵工業（株）研究開発企画室 〒100 千代田区大手町 1-6-1 大手町ビル
間中研一	〒321-02 栃木県下都賀郡壬生町幸町 3-4-11 ☎0282-86-1783	獨協医科大学総研組織培養研究室 〒321-02 栃木県下都賀郡壬生町大字北小林880 ☎0282-86-1111
毛利哲郎		北陸大学薬学部附属創薬研究施設第2 研究部 〒920-11 金沢市金川町ホ 3 ☎0762-29-1161
元井信		国立病院四国がんセンター臨床研究部 〒790 松山市堀之内 13
鈴木利光	〒960 福島市渡利八幡町 151 医大アパート 3-D	福島県立医大病理学第2 〒960-12 福島市光が丘1 ☎0245-48-2111